

13 Community

視聴者コミュニティ

1 頁: JAPAN デビュー要望書
 2,3 頁: 全国連絡会申し入れ
 4,5 頁: 坂の上の雲シンポ
 6 頁: NHK 回答書
 7,8 頁: コラム(醍醐さん)
 コラム(桂さん)

専用 FAX 059-222-3165
 「WATCH」原稿募集中!
 「OPINION」原稿募集中!

NHK を監視・激励する視聴者コミュニティ

<http://kgcomshky.cocolog-nifty.com/blog/>

入会申込みフォーマットは (年会費 1000 円 shichoshacomunity@yahoo.co.jp)

<http://space.geocities.jp/shichoshacomunity/HPshichoshacomunity/nyukai.html>

NHK スペシャル「JAPAN デビュー」 が攻撃されている問題について NHK 会長に要望書を提出しました。

「NHK を監視・激励する視聴者コミュニティ」は 2009 年 7 月 7 日、「開かれた NHK をめざす全国連絡会」(3 頁参照)とともに、4 月 5 日に放送された NHK スペシャル「JAPAN デビュー」第 1 回「アジアの“一等国”」に加えられている攻撃について、福地 NHK 会長に宛てた要望書を提出しました。(NHK とのやりとり、記者会見は 2 頁参照)

要望書は、この番組がこれまで十分に伝えられてこなかった日清戦争後の日本による台湾統治の実態を豊富な資料と取材に基づいてリアルに描いた点を高く評価しています。そのうえで、要望書は、NHK が、この番組に対して一部国会議員やグループが仕掛けている攻撃にひるむことなく、放送の自由、自律を堅持していることを激励し、JAPAN デビューシリーズが今後も歴史の実相に迫る良質の番組を放送するよう求めています。

NHK 会長

福地茂雄 様

要 望 書 2009 年 7 月 7 日

NHK を監視・激励する視聴者コミュニティ

共同代表 醍醐 聡・湯山哲守

貴職におかれましては、NHK が公共放送の中軸として、また健全なジャ・ナリズムとして発展することをめざして日々ご奮闘のことと拝察します。

さて、さる 4 月 5 日放送の NHK スペシャル「JAPAN デビュー」第 1 回「アジアの“一等国”」が放送されました。その内容は日本が明治維新を経て近代国家をめざして国づくりする途上、欧米列強と競う

あまり、自らもその列強の仲間入りを果たすべく、日清戦争によって「獲得」した台湾を最初の植民地として統治した実相を、現存する膨大な一次資料に基づいて描いた労作であると評価しています。

これまでの一般書には、割譲後の台湾を「島民の頑強な抵抗を武力で鎮圧した」(山川出版「詳説日本史」)などと記述されてきました。ところが今回、史実を「日台戦争」と位置付けて説明し、川下から圧倒的な武力で攻め上ってきた日本兵による現地住民制圧の歴史を、肉親から聞かされてきたとする老人の証言等、説得力ある取材情報に基づき展開しました。これまで必ずしも十分には伝えられてこなかった日清戦争後の台湾支配を契機とした植民地主義への道を理解する上で大変貴重な番組であったと思います。

私たち NHK を監視・激励する視聴者コミュニティは、常に、公共放送としての NHK の公正な放送と、ジャ・ナリストとしての鋭い視点からの番組提供を求めてきました。「JAPAN デビュー」が期待に応えるに相応しいものであったと高く評価します。

ところで、この放送に対して、「やらせ取材、歪曲取材、印象操作編集による偏向報道」と断定した抗議行動が展開されています。ETV 2001「戦時性暴力」番組に改編の圧力を加えた安倍晋三元首相が今回も策動し、「番組を作っている人自身が思惑を持って作っている。・・圧力をかけるつもりはないが、偏向していなかったかどうか質していく。」などと、またぞろイ



ンタ・ネット放送などを通じて NHK への攻撃をしています。2001 年と同じ状況が生まれる恐れが生じています。

<http://www.youtube.com/watch?v=twjpmjtoBRk&feature=channel> 参照

議事録によれば、今回、貴局は経営委員会でこの事態に対して活発に議論を行い、貴職も適切に意見を開陳しています。

また、NHK としても公式に 6 月 17 日付で『説明』(「シリーズ・JAPAN デビュー」第 1 回『アジアの“一等国”』)に関する説明)を発表し反論しています。問題となっている「人間動物園」「日台戦争」など 5 つの言葉について、発掘資料と専門家たちの研究成果に依存して用いた経緯の説明も説得的だと思われました。

さる 5 月 12 日の経営委員会の冒頭で貴職が述べた「ジャ・ナリストというのは、自分の目で確かめ、自分の耳で確かめ、自分の手で確かめ、自分の足で確かめ、自分の体で体感するように。それがジャ・ナリストだ。私の言う現場主義だと話しました。あつものに懲りてなますを吹くようなことにならないように。しかし、ペンと政治との距離は画然としていくべき。一方で、編集権、番組編集の自由は、不偏不党の立場を守ることで担保されるものだ。」という言葉は「番組改編についての BPO『意見』」と JAPAN デビュー - 問題双方に関する発言だと思われませんが、傾聴に値するものと思えました。また、貴職は自ら 3 度にわたって同番組を視聴した結果、「確かに見る人の見方によっては国辱だということはあると思います。しかし、軸足を植民地政策に置いたら、こういったことはありうるだろうという感じがしました。」と同委員会において発言しておられますが、それは確固たる信念に基づいたものと受け

取れました。そしてその言葉には、この番組を制作したスタッフへの厚い信頼を感じ取ることができます。

報道によれば、当番組は「事実を捏造(ねつぞう)し、偏向した放送法違反の内容だ」として、小田村四郎・元拓殖大総長ら8389人が25日、NHKを相手に1人当たり1万円の損害賠償を求めて東京地裁に

提訴したとのことです(『毎日』6月26日付)。この局面で、私たちは貴局が放送ガイドラインや先の『説明』に基づき、確信を持ってこのような攻撃に対処され、この後に続くシリーズ番組でも不当な攻撃に動じることなく、歴史の事実を直視した良質の番組を制作されるよう強く願うものです。

最後に、今回の国会議員を擁し、権力を背景にした勢力が特定の番組に圧力を集中する構図は2001ETV番組と同じものです。多くの視聴者がNHKに対する信頼を取り戻す大きな一歩になるものと確信し、改めて、貴局、貴職が毅然として対処することを要望するものです。

「開かれたNHKをめざす全国連絡会」 『放送の自主自律』堅持を求めNHKに申し入れ

7月7日午後、「開かれたNHKをめざす全国連絡会」は、NHKに「不当な非難・中傷に屈せず『放送の自主自律』堅持を」など3つの文書を提出、申し入れを行いました。

参加したのは、世話人松田 浩(元立命館大学教授)他7名、NHKは視聴者センター担当部長・荒井弘志氏と統括担当部長・堀江威光の2氏が応対しました。

会を代表して松田世話人が申し入れの趣旨を説明、その後以下の対応がありました。

4月5日放送されたJAPANデビュー第1回『アジアの“一等国”』に対し、自虐史観の立場に立つ勢力から激しい攻撃が加えられその背後には、『番組を検証する』と結成された自民党の議員連盟がいる。呼応するように経営委員会では小林委員が『放送法違反』と番組を攻撃、放送法第16条を空文化する法文解釈を展開している。NHKの内外から放送の自由を脅かす行動が大がかりに展開され、2001年のETV改変事件と酷似している。公共放送の危機に、NHKは経営委員会・理事会・職員のみなさん丸となって立ち向かい、頑張してほしい。

「番組を視聴したが優れた番組だった。ギャラクシー賞の選考委員もしているが、『アジアの“一等国”』を月間賞に選んだ途端、桜チャンネルなどの激しい批判が展開されびっくりしている。NHKは番組面で視聴者の信頼回復に努力しているが、現場は頑張っている事態を乗り切りたい」

「番組批判は自由だが、右翼の人々の

抗議は『表現の自由』を逸脱する行動で遺憾。NHKはどのような対応を?」と質問、NHKは「局内に乱入するなどのことがあ

って以後、『申し入れや抗議は手渡しでなく郵送で』お願いしている」との回答でした。

「番組を見たが、取材を終えて帰りがけたマイクを引き止めて積年の無念さをせき込むように訴えかけた台湾の人々の姿に感銘を受けた。批判に対する回答もNHKHPでの『説明』に尽くされている。BPO意見書への対応には大いに疑問を感じているが、今回の出来事はその姿勢を改めるかどうかを見分ける試金石、誠実な対応で信頼回復の好機にして欲しい。

番組は、多くのJCC会員からも好評の声が寄せられている。台湾は親日的と思っていた多くの人々が、番組から台湾統治の新事実を知って認識を新たに。威嚇的な非難・中傷に屈せず『放送の自主・自律』を貫いて欲しい。「私たちの要請を、現場の人たちには是非伝えて欲しい」と求めたのに対し、NHKは「検討する」と回答、具体的方法は明言しませんでした。

「結成された自民党議連からはNHKに申し入れや抗議が来ているのか?」「取材した台湾の人々からNHKに何らかの申し入れがあったのか?」と質問しました

が、その場では回答できず「調べます」との回答でした。

最後に、「逸脱した法文解釈で個別番組の編集に干渉する小林経営委員に対しては、理事者側も法に則って毅然と対応して欲しい」と強く要請して申し入れを終わりました。

その後、国会内で記者会見、新聞は読売・東京(中日)・朝日・毎日・産経・赤旗、ほかに共同通信・NHKの各社から取材を受けました。

NHKから取材に来たのは、政治部副部長の肩書きの記者でした。



「開かれたNHKをめざす全国連絡会」として提出した文書は

NHK理事・職員の皆様へ「不当な非難・中傷に屈せず『放送の自主自律』堅持を～NHKスペシャル『アジアの“一等国”』をめぐる～」

NHK経営委員会宛て「要望書」

NHK会長・理事宛て「要望書」

ですがその他

A. 「NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ」提出、NHK会長宛て「要望書」
B. JCC提出、「NHKスペシャル『アジアの“一等国”』に対する非難・中傷などの動きについて」があります

(当コミュニティ以外の文書は<http://kgcomshky.cocolog-nifty.com/blog/>でご覧ください。)

「開かれたNHKをめざす全国連絡会」参加の呼びかけ

「開かれたNHKをめざす全国連絡会」は2009/03/13に「ニュースレター No.10」の5ページで

「開かれたNHK経営委員会をめざす会」では、この取り組みを今後どのように継承してゆくかを議論し、次のステップに進みたいと考えています。新たなご提案をまとめることができましたら、再びみなさまに呼びかけたいと思います。"--とご報告した「めざす会」を発展改組した新組織で、これまでの運動の経験を生かし、新たな共通の活動目標を実現するための全国連絡組織として本年6月に再出発したものです。

(以下はその呼びかけ文です。)

「開かれたNHKをめざす全国連絡会」
参加の呼びかけ

2009年6月22日

開かれたNHKをめざす全国連絡会

(世話人)

松田 浩(メディア研究者・元立命館大学教授)

醍醐 聡(NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ共同代表・東大教授)

岩崎 貞明(メディア総合研究所事務局長・放送レポート編集長)

隅井 孝雄(日本ジャーナリスト会議代表委員・京都ノートルダム女子大学客員教授)

(参加団体)

NHK問題大阪連絡会

NHK問題京都連絡会

NHK問題を考える会(兵庫)

NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ

放送を語る会

「開かれたNHK経営委員会をめざす会」(以下、「めざす会」)は2008年10月結成され、「視聴者主権」の理念のもとNHK経営委員候補の推薦運動を中心に取り組んできました。

この運動がめざしたのは、政府(内閣総理大臣)がNHK経営委員の選定と任命の権限をにぎる現行の仕組みに公募・推薦制導入の道を開き、経営委員選任のプロセ

スを、よりオープンで視聴者参加型の公正な枠組みに改革していくことでした。

桂敬一・湯山哲守両独立候補の擁立運動は、そのための重要な第一歩でした。

それは、安倍元首相や菅元総務相によって送り込まれた古森重隆・経営委員長(フジフィルム社長)のもとで経営委員会が政府・財界によるNHK支配の道具に変えられ、公共放送が危機にさらされていたなかで、それに歯止めをかけ、「自主・自立」のNHK、「視聴者主権」のNHKへと大きく流れを変えることを意味していました。

幸い「めざす会」の呼びかけは各方面から広く支持され、「NHK経営委員の公募・推薦制と古森重隆氏の不再任を求め」署名では全国から15,023筆の賛同者名簿を集めて、内閣府や野党各党に提出することができました。

また桂敬一・湯山哲守両独立候補推薦の賛同署名は2061筆に達し、川口幹夫・元NHK会長をはじめ、放送倫理・番組向上機構(BPO)初代理事長清水英夫氏、ジャーナリスト・元共同通信社長原寿雄氏、経済評論家内橋克人氏、福岡大学名誉教授石村善治氏(言論法研究者)など多くの著名な方々から力強い推薦メッセージをいただくことができました。

シンポジウム「開かれたNHK経営委員会をめざして」や院内集会「視聴者・市民の候補者と各界・諸政党との意見交換会」などを通じて世論に訴え、各政党まで議論の輪に加えてメディアで大きく取上げられたことも、運動として貴重な収穫でした。

今回のNHK経営委員の選任過程は従来と大きく異なる展開をみせましたが、その背景に視聴者・市民運動のこうした高揚があったことを見落とせません。政府の名簿提出に先立って古森重隆委員長が異例の一期限りで辞意を表明したこと、参議院で政府の提案した4候補のうち古森経営委員長を支えた再任候補2名と財界出身の新任候補1名が野党の反対で不同意になったこと、また政府が2月に再提出した名簿から財界出身の候補者が削られていたことなど これらは、

いずれも運動がもたらした成果でした。

私たちの推薦した桂敬一・湯山哲守両候補の選任こそありませんでしたが、視聴者・市民の運動がNHK経営委員選任をめぐって放送史上かつてなかった新しい局面をつくりだした事実は、「めざす会」が経営委員選任にあたって提起した3原則(公募・推薦制の導入 選出基準の明確化と選出過程の透明性確保 国会同意に先立っての委員候補者の視聴者向け所信表明)とともに、今後の運動への大きな足がかりになるものと確信します。任期満了の経営委員選任をめぐっての今回の推薦運動は、委員が決まったことで一応、決着をみました。

これまでの署名活動と候補推薦活動を収束させるにあたり「めざす会」は会を発展改組し、次の活動目標を掲げて、今後より大きな視聴者・市民運動に取り組むことを、ここに全国各地でご協力いただいたみなさんにご提案します。

「めざす会」を発展改組した新組織「開かれたNHKをめざす全国連絡会」は、これまでの運動の経験を生かし、新たな共通の活動目標を実現するための全国連絡組織として再出発します。

各地の皆さんに広く議論をお願いすると同時にし、趣旨に賛同する多くの団体や個人の方々が、この運動に参加して下さることを心から期待します。

「開かれたNHKをめざす全国連絡会」

《 活動目標 》

公共放送・NHKが自主・自立の立場で「放送の公共的機能」を貫けるよう、「視聴者主権」の理念にもとづいて各種の取り組みを進める。必要に応じて見解表明や署名運動、申入れなどを行う。

視聴者・市民に開かれた公共放送に向けて会長・経営委員の公募・推薦運動を引きつづき推進する。また委員選任の公正な仕組みについても改革案を研究、提起する。

NHKをめぐる国会審議のあり方については、予算・事業計画案の国会提出に先立って与党が審議・承認する放送法逸脱の慣行を廃止させるなど、政府・与党の政治介入を封ずるための方策を追求する。

政府・与党による政治介入の根源で

ある現行電波・放送行政の仕組みを変え、政府からの分離をめざして合議制「独立行政機構」などの導入を研究・提言する。

膨大な数の「テレビ難民」、世帯の出現が危惧される2011年7月のアナログ放送一方的打ち切りに反対し、停波時期については、民主的な合意形成を求めていく。

視聴者・市民の立場から制作者・ジャーナリストの「内部的自由」確立のために尽力し、放送労働団体などとも連携してその実現をはかる。

その他、広く放送の公共性を守るために、必要に応じて、さまざまな取り組みを行う。

以上の目的を達成するためには、広範な世論と社会的合意の形成が欠かせない。そのために各方面の研究者、職能団体と力をあわせて視聴者・市民の立場に立ったメディア政策やコミュニケーション政策の確立をめざし、シンポジウム・講演会等を通じて広く国民的論議を組織する。

《 組織体制および財政 》

1. 組織体制

現行の世話人制を世話人・運営委員会制に改組する。

新しい会は各地で活動する視聴者・

市民団体、ジャーナリスト職能組織、メディア研究者・ジャーナリスト有志などの幅広い全国連絡組織とし、共通の活動目標のもとに連携を取り合い、運動を行う。各団体、個人は自主性を尊重され、それぞれの条件に応じて運動に参加する。新しい会の日常的な運営、共同行動に関する意思決定は、参加団体の代表からなる運営委員会で討議、決定する。世話人と運営委員の関係は次のように整理する。

*世話人：

これまでと同様に会に3～4名程度の世話人を置く。世話人は会を代表する対外的な「顔」として機能し、広範囲な文化人、ジャーナリズム関係者に運動への参加を呼びかける際には「呼びかけ人」として中核的な役割を果たす。また素案づくり等の協議に加わることで、運営委員会の意思決定に後見人的役割を担う。

*運営委員：

- ・いくつかの参加団体の代表者で構成し、できれば4名程度の機動的な意思決定ができる体制とする。
- ・各種文書の素案作り等、活動の原案作りを受け持つ。
- ・運営委員のなかから事務局長を1名選出する。

運営委員会でまとめた各種原案を会に参加する個人、団体に送信し協議のうえ、会の正式の文書、見解、運動方針とする。

2. 各地での組織づくり

可能な範囲で各参加団体の会員、賛同者の名簿を交換し、数名の会員、賛同者が居住する地域ごとに、新しい「会」に参加する新組織立ち上げの取組みを進める。

NHKが視聴者との間で行う「語る会」のスケジュールなどとも合わせて、当面、本年中に名古屋、広島、札幌などで新しい組織の設立を目指す。

3. 財政

年会費：

団体一口5,000円、個人一口3,000円
賛助金（カンパ）

会には参加できないが、会の趣旨に賛同する団体、個人から賛助金（1口、1,000円）を募る。

参加団体の世話人・運営委員のなかから1名以上の会計担当を選ぶ。



「NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』を考えるシンポジウム」の報告

"Column NHK ドラマ「坂の上の雲」放送の中止を！"でお知らせした「NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』を考えるシンポジウム」が7/18開催されました。シンポジウムに参加した共同代表 湯山哲守氏が報告します。

当日は主催者の予想（150人、多くて180人）を遙かに超える200人の方が参加されました。用意したパンフやレジュメが不足するという状況でした。

NHKの「坂の上の雲」キャンペーンが行われています。憲法改悪の危険が進行する中、あまりにも無頓着です。主役秋山真

で年末に3年間13回にわたって続けられることに多くの人が疑問を呈しました。基調講演をこの問題で早くから警鐘をならしつつ多くの講演活動を行っておられる奈良女子大名誉教授の中塚明氏が行い、「日露戦争の時代」の著書をもつ前、京都府立大学学長の井口和起さん、京都シネマ代表の神谷雅子さん、映画監督の土橋亨さん、弁護士の渡邊輝人さん、そして私、湯山がパネリストとしてそれぞれの問題意識に基づいて話しました。私はジャパンデビューの放送をめぐる安倍氏らのNHKへの介入問題と市民運動の反撃について話しました。

之役を米アカデミー賞「おくりびと」で名を馳せた本木雅弘にするなど豪華キャスト

シンポジウムの結果を受けて、NHK 福地会長宛の「公開質問書」を携え、7月22日に実行委員会のメンバーが(岩井忠熊実行委員長以下5人が参加)NHK 京都放送局を訪問し、森田副局長と面談しました。「回答」を8月17日までにもらえるように申し入れました。

公開質問書

2009（平成21）年7月22日

日本放送協会
会長 福地茂雄様

「NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』を考える」市民シンポジウム実行委員会
実行委員長 岩井忠熊
〔はじめに〕

NHKは平成21年11月から、スペシャルドラマとして、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」を放映する計画をしています。しかし、「坂の上の雲」は、作者自身が生前

テレビドラマ化を承諾しなかったといういわくつきの作品です。

自衛隊がソマリア沖に出動し、海外派兵の恒久化がおしすすめられようとしているこの時期に、NHKが「坂の上の雲」をテレビドラマとして放映することは、憲法9条の改悪の動きにつながる危険性を多分にはらむものといわなければなりません。そこで、私たちは、NHKによる「坂の上の雲」のテレビ放映を市民の立場から批判して、議論を巻き起こしていく必要があると考え、去る7月18日、「NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」を考える」市民シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、近代史の研究者やメディア関係者をはじめ、趣旨に賛同する市民によって結成された実行委員会の主催したのですが、当日のシンポには、私たち主催者の予想を上回る約200人の市民が参加して、熱心に議論がなされました。このことは、この問題に対する市民の関心の高さを示すものにほかなりません。このシンポジウムの内容は、別紙の資料のとおりですが、このシンポの議論を通して、今回のテレビ放映には、さまざまな疑問や問題のあることがうかがわれました。そこで、明らかになった主な疑問を紹介すると、次のとおりです。

〔スペシャルドラマ「坂の上の雲」の放映をめぐる疑問〕

1、司馬遼太郎は、生前、「坂の上の雲」の映像化を拒み続け、その理由について、ミリタリズムを鼓吹しているように誤解される恐れがあること、しかもそれが弊害をもたらすかもしれないことをあげています。

NHKが何故、上述した誤解や弊害をおそれた作者の遺志に反して、「坂の上の雲」をテレビドラマとして放映するのか、非常に大きな疑問をもたざるをえません。

2、「坂の上の雲」は、日露戦争を祖国防衛戦争ととらえたうえで、明治の若者たちが祖国日本の防衛のためにいかにかたかたかという視点から描かれています。しかし、日露戦争は、日本とロシアとの間でたたかわれた植民地争奪戦争であり、このことは、日本が日露戦争に勝って間もなく、朝鮮を植民地にしたことから明らかです。

NHKが「坂の上の雲」をテレビドラマとして放映することは、日露戦争を祖国防衛戦争とみる、特定の誤った歴史観を視聴者に押しつけるものであり、中国や朝鮮など北東アジアの人々の感情を逆なでするものであって、公共放送のあり方からいっても重大な疑問があります。

3、NHKは、「坂の上の雲」をスペシャルドラマとして制作するにあたって、このドラマを「国民ひとりひとりが少年のような希望をもって国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて日露戦争を戦った『少年の国・明治』の物語」であるとしています。しかし、この作品の主人公である秋山好古、真之兄弟のように、日露戦争を戦った軍人だけが明治の若者ではなく、日露戦争に反対した内村鑑三や幸徳秋水、堺利彦、さらには「君死にたもうことなかれ」とうたった与謝野晶子などの存在もまた、日本の近代化を考えるうえで、重要なことはいうまでもありません。



(7/18 京都新聞より)

にもかかわらず、こうした日露戦争に反対し、これを批判した明治の若者の存在を無視した「坂の上の雲」のテレビドラマ化は、「ミリタリズムを鼓吹」する危険があることはいうまでもないことです。しかも、こうした危険のあるドラマの最終回(「日本海海戦」)をもって、NHK「プロジェクトジャパン」の企画を締めくくることが、大きな疑問や懸念をもたざるをえません。

4、一昨年5月に憲法「改正」手続法が成立し、平成22年5月から施行されます。この法律の施行により、国会で3分の2以上の議決により、憲法「改正」が発議されると、国民投票が実施されることとなります。こうした時期に、「坂の上の雲」がテレビドラマとして放映されることは、一歩間違えば、「ミリタリズムを鼓吹」することによって、憲法9条の改悪に向けた世論操作に利用されるおそれがあることは

明らかです。このことは作者自身が映像化による誤解や弊害が生ずることを恐れていたことから裏付けられます。私たちが、こうした時期にNHKがスペシャルドラマ「坂の上の雲」を放映することに大きな疑問を持つのはここにあります。

〔質問事項〕

私たちは、今回のシンポジウムのなかで明らかになった以上のような疑問にもとづき、NHKに対して、以下の事項について質問いたします。

1 作者が生前、具体的な理由をあげて、「坂の上の雲」のテレビドラマ化に同意しなかったにもかかわらず、今回NHKが遺族の同意をとりつけて放映することは、作者の遺志をふみにじるものであって、将来に大きな禍根を残すものといわなければなりません。NHKが何故、作者の遺志を無視してまで、「坂の上の雲」の放映に踏み切るのか、その理由を明らかにして下さい。

また、作者の司馬遼太郎が生前放映に同意しない理由としてあげていた、ミリタリズムを鼓吹するおそれや、それによってもたらされる弊害については、根拠のないものなのか、NHKとしての見解を明らかにしていただきたい。

2 司馬遼太郎が、生前「坂の上の雲」の映像化を拒み続けた理由となっているミリタリズムを鼓吹するおそれや、それによってもたらされる弊害は、決して無視することのできないものといわなければなりません。

そこで、おたずねしますが、NHKは今回「坂の上の雲」の映像化にあたって、作者の指摘している上述したおそれや弊害をとりのぞくために、何らかの対応をとることを検討されているのでしょうか。もし、そのことを検討されているとすれば、その具体的な方策を明らかにしていただきたい。

3 「坂の上の雲」は、日露戦争を祖国防衛戦争ととらえています。NHKがこれをテレビドラマ化することは、日露戦争を祖国防衛戦争とみる、特定の誤った歴史観を視聴者に押しつけることとなります。

したがって、NHKは、公共放送の立場から「坂の上の雲」のドラマ放映にあたって、日露戦争が植民地争奪戦争であることを視聴者に正確に伝える必要があり、その

ことは中国や朝鮮半島など北東アジアの人々との関係でも重要なことと考えます。

そこで、おたずねいたしますが、NHKは今回の、「坂の上の雲」の映像化にあたって、その点について、どのような検討をされ、またどのような措置をとられるのか具体的に明らかにしていただきたい。

4 「坂の上の雲」の主人公は、秋山好古、真之兄弟であり、日露戦争を闘った職業軍人であることはいうまでもありません。また、秋山兄弟の四国松山の同郷であり、真之の親友であった正岡子規も、日清戦争には自ら望んで、従軍記者として参加しています。

しかし、その一方で、戦争に反対し、これを批判した明治の若者がいたことも、まぎれない事実であり、これを無視することは、作者が誤解されることをおそれたようにミリタリズムを鼓吹することになることは明らかです。

そこで、おたずねいたしますが、NHKは今回、「坂の上の雲」の映像化にあつ

て、日露戦争に反対し、これを批判した内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦、与謝野晶子など少なからぬ人々がいたことについても視聴者に正確に伝える必要があると思われませんが、この点について、どのような検討をされ、またどのような措置をとられるのか具体的に明らかにしていただきたい。

5 平成 22 年 5 月から、憲法「改正」手続法が施行され、国会で 3 分の 2 以上の議決により、憲法「改正」が発議されると、国民投票が実施されることとなります。NHK が公表している「坂の上の雲」の放送計画によれば、平成 22 年秋の第 8 回から平成 23 年秋の第 13 回（最終回）まででは、日露戦争そのものがテーマとなり、このままでは、国民のなかにミリタリズムを肯定する雰囲気醸成して、憲法 9 条改悪の世論操作に利用される危険性をはらんでいるといわなければなりません。

そこで、おたずねいたしますが、NHKは、今回「坂の上の雲」の映像化にあつて、上述した憲法「改正」の国民投票との

関係で、憲法 9 条改悪の世論操作に利用される危険性について、どのように検討されたのか、また上述した危険性をとりのぞくために、どのような手だてをとられるのか、具体的に明らかにしていただきたい。

〔結び〕

以上の質問事項は、NHK の公共放送としてのあり方の基本にかかわる重要な問題であると考えます。

つきましては、ご多用中、お手数ではあります。平成 21 年 8 月 17 日まで、文書をもって回答いただきますようお願いいたします。なお、私たちがこの質問書で提起した問題点は、今回の「坂の上の雲」の映像化にあたって、継続して監視し、検証していく必要がある事項であると考えます。そこで私たちは、この問題に関して、NHK と今後とも引き続き話し合いの機会をもっていくことについても、あわせて要望するものです。 以上

上記質問書に対する NHK の回答書

NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」を考える市民シンポジウム実行委員会

実行委員長 岩井 忠熊 殿

2009（平成21）年7月22日付で当協会に送られた公開質問書に対して、会長 福地茂雄に代わって小職、放送総局エグゼクティブプロデューサー 西村 与志木がお答えします。

司馬遼太郎氏は小説「坂の上の雲」を戦争賛美の姿勢で書かれたものではありません。スペシャルドラマ「坂の上の雲」は司馬氏のこうした思いを生かしたかたちで制作するものです。近代国家の第一歩を記した明治のエネルギーと苦悩をこれまでにないスケールのドラマとして描き、現代の日本人に勇気と示唆を与えるものになりたいと思います。なにとぞ、ご理解いただきたく存じます。

平成21年7月30日

日本放送協会 放送総局「坂の上の雲」プロジェクト
エグゼクティブプロデューサー 西村 与志木

当コミュニティからのコメント

湯山哲守さん

「NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』を考えるシンポジウム」でNHK会長宛に送った質問状に対する「『坂の上の雲』プロジェクト・エグゼクティブプロデューサー西村与志木氏「回答」」は質問の中身にほとんど言及することなく、質問者を馬鹿にしたものと言ってもよい内容です。「対話」を拒否するがごとき同氏のこのような回答は腹立たしい限りです。

醍醐聡さん

西村与志木氏名の回答を読みました。返事をしなかったといわれないう、アリバイを作るためだけに送られてきた文書のように思えました。

”スペシャルドラマ「坂の上の雲」は司馬氏のこうした思いを生かしたかたちで制作するものです。近代国家の第一歩を記した明治のエネルギーと苦悩をこれまでにないスケールのドラマとして描き、現代の日本人に勇気と示唆を与えるものになりたいと思います。”

下線の部分の「こうした」が指す文章が前にありませんので、どういう思いなのか意味不明です。「明治のエネルギーと苦悩」を特定の個人のエネルギーと苦悩に還元し、歴史を動かした民衆のエネルギーに触れない、あるいは民衆が歴史を動かす主役になれなかった日本の民主主義の未熟さに触れない「大河ドラマ」の制作姿勢が問われているのだという認識がないように思えました。



Column

「他虐」を「自虐」と言い
くるめる本末転倒のナショ
ナリズム

「NHKスペシャル」JAPANデビュー
への攻撃に思うこと

共同代表 「醍醐聡のブログ」より

4月5日に放送されたNHKスペシャル
「JAPANデビュー」第1回「アジアの
「等国」を偏向番組だとして、集団提訴が起
こされた。番組は「やらせ」もまじえて、

日本による台湾統治の功の部分伝えず、
負の部分捏造または誇大に伝えたものだ
というのが、その言い分である。

しかし、私も見たあの番組は、日中戦争
の勃発に伴って始まった皇民化政策の下で
日本語の使用や「改姓名」と称した日本人
名への改称が強要されたこと、日本軍兵士
として駆り出されながら、いまだに生死も
不明の台湾人が多いことなどが一次資料や
当事者の証言に基づいて明かしていた。

中でも、私の印象に鮮明に残っているの
は台北第一中学校卒業生が日本による台湾
統治時代の生き証人として登場し、日本人
の嫁になってもなかなか戸籍を入れてもら
えなかった差別の実態を赤裸々に語った場
面、天皇の臣民と称して叩き込まれた教育
勅語を口々に朗読しながら、積年の無念さ

を取材カメラに向かってせき込むように訴
えかける老台湾人の姿だった。

そこで、私が提案したいのは、あの番組
を再放送して、もっと多くの市民に視聴の
機会を提供することである。番組の評価は
威圧的な攻撃によってではなく、番組を見
た多くの視聴者の自由な言論に委ねるこ
と、各自が自分と異なる意見、感想に触れ
ることによって、思考の固定化と独善を克
服すること。これこそが成熟した民主主
義国家にふさわしい放送番組批評のあり方
であり、言論の広場としての公共放送の姿
である。

近年、わが国では他民族に対する日本の
侵略・植民地的統治の歴史を伝えること、
語ることを「反日」というレッテルを貼っ
て攻撃する「自虐」史観なるイデオロギー
が流布されている。しかし、どのような歴
史「観」もそれによって歴史の事実を勝手に
改編することはできない。どのような歴
史観も歴史の事実を依拠しなければ、「観」
というに値しない。この意味で、NHKス
ペシャル「アジアの「等国」」が伝えた日
本による台湾統治の実態を、日本人が自分
を貶める「自虐」とみる人々は、日本によ
る他民族の虐待「他虐」を「自虐」と言
いくるめるに等しい。

Column

Nスペ「JAPANデビュー：アジアの
等国」の向こうにあるもの

桂 敬一

(日本ジャーナリスト会議会員)

今回、NHKを自分たちのいいなりにさせよう
と蠢動をみせだした、小林経営委員も含む
勢力がいちゃもんをつけたのは、この番組
に対してでした。これに対して、NHK側が
十分に毅然と立ち向かっており、私たちは
それを、安心して激励していけばもう大丈
夫だ、といえる状況になっているでしょう
か。私にはどうもそうは思えません。今
回の騒ぎは、大きな揺さぶりと干渉の前の
ほんの序奏であって、これからが勝負だ
と思っています。

「JAPANデビュー」シリーズは、NHKが
現時点を歴史の大転換点と捉え構想した、
壮大な「プロジェクトJAPAN」の一部で
しかありません。それは、「未来へのプレー
バック。私たちは、世界の中でどう生き
た。そして、これから、どう生きる。」を
キャッチ・フレーズとする、いわ

ばNHK版『バック・トゥー・

ザ・フューチャー』で、「2009年 横浜開港
から150年」「2010年 韓国併合から100
年」「太平洋戦争開始70年・サンフランシ
スコ講和条約60年」とする構成で、今
年を含め3年にわたってさまざまなスペ
シャル番組を展開していくという、実に
壮大な企画です。詳細は、ぜひNHKの
サイトにアクセスしてご覧ください。

www.nhk.or.jp/japan/about/index.html

しかし、こういう企画が歴史的転機として
の21世紀の今を正しく照らし出し、この
後の日本の望ましい針路を描き出せるか
といえ、その保障はまったくありません。
むしろ、過去の歴史的転機の捉え方、そ
のときどきの問題設定をみると、第2次
大戦敗戦以後の歴史の意味を全部ひっくり返
し、それ以前の日本の歴史的正当性を蘇
らせ、これを21世紀の今に、無理にも(見



かけはいかにも自然に)接ぎ木しよう
とすることになるおそれがある、と危惧
されます。今度の騒ぎを起こした連中は、
そうさせていくことができる可能性を値
踏みして、NHKに対し、「プロジェクト

JAPAN]全体をちゃんとやれ、いい加減
なことをしたら承知せんと、と動きだ
したのが本当のところでしょう。この
威嚇効果は馬鹿にできません。NHKは
イデオロギーがどうのこうのより、「興
行的」にこのプロジェクトをぜひとも
成功させたい弱みがあります。敵は、
そのアキレス腱を容赦なく狙ってくる
からです。

この大プロジェクトのなかで、目玉中の
目玉は、司馬遼太郎原作の小説、『坂上
の雲』のドラマ化です。これもまた、
2009年に11月29日(日)から年内の
全日曜日・5回の特番で放送するのを
嚆矢とし、つづけて2010・2011の
両年もほぼ同じ時期、それぞれ4回
の連続特番ドラマとして制作・放送
する予定とされています。本年5回
分のロケーション撮影は、国内18都
府県、外国=露・中・仏・英などで

材撮りをほぼ終えたようです。ロケの行われた登場人物ゆかりの県では、すでに大々的な番組宣伝・イベントが行われつつあり、前人氣が煽られています。多くの財界人や大物政治家が好きな作家のトップにもってくる司馬遼太郎、しかも、本当の主人公は「日清戦争」「日露戦争」そのものだともいべき『坂の上の雲』が原作のドラマです。これがNHKによって3年もつづけて放送されるというのは、まさに容易ならざることです。

司馬遼太郎は生前、この作品のテレビ・ドラマ化も映画化も許さない、と明言していました。容易に戦争賛美の話に仕立てられてしまう危険があることを、危惧したからです。日本近代の青春時代ともいべき明治期の青年たち、正岡子規や秋山兄弟たちの青春群像を描こうとした自分の意図がねじ曲げられるのを、おそれていたようです。ところが、彼の死後、NHKの海老沢勝二会長（当時）が、2005年に日露戦争100年を記念した大河ドラマ『坂の上の雲』を放送したいと考え、遺族を猛アタック、ドラマ化権を獲得、作家・野沢尚に脚本作成を依頼したのです。ところが、野沢尚は脚本未完成のまま自殺し、NHKは、2004年に受信料使い込み不祥事件が起き、2005年には政治家の介入によるETV2001番組改変問題が発覚、受信料収入の低落も生じ、海老沢会長が辞任、ドラマの実現は大幅に遅れる結果となっていたのです。

ところが、フタを開けてみたら、海老沢後のNHKは、1年こっきりの大河ドラマよりはるかに巨額の制作費を投じ、有名俳優・タレントを多数動員、3年にもわたって放送する巨編ドラマをでかしあげる方向に進んだのです。いってみれば、これは焼け太りです。しかも、時代は、2005年・小泉郵政民営化選挙の大勝、自民党の改憲方針具体化、安倍改憲内閣登場・防衛省出現、麻生内閣の対「北」強硬政策の繰り返

し・海賊対処法制定、などの出来事が生じ、戦後の平和体制を否定する勢力がいつの間にかのさばり、日本がこの21世紀にありながら、国際社会における軍事的プレゼンスをまた大きくしつつあるのが、最近の事情です。政治の実態は、安倍政権以後、あてどない漂流をつづけるだけで、戦後政治最大の危機が生じているというのに、このような事態が放置されています。その責任をメディアも大きく負っています。現状追隨に流れて国民の劣化を招き、その国民に迎合してみずからも劣化を深め、こうした負のスパイラルから抜けきれないからです。

NHKが向こう3年間、政財界の“司馬好き”、歴史を物語る彼の語り口の面白さに魅せられる国民の人気にかまけて『坂の上の雲』を放送、大成功を獲得したら、いったいどういうことになるでしょうか。一つの番組の偏向、良否を論ずるという番組批評の領域をはるかに超え、戦後民主主義の経験と、そこにおける歴史認識を土台に形成されてきた国民世論のありようが、大きく変質することになり、NHKというもののあり方そのものが、大きく変わる 変えられてしまう危険がある、と私は憂慮するのですが、それは杞憂でしょうか。あるいは、国民的合意の下にNHKが変わっていくのなら、国民のNHKを標榜するNHKにとって、それは望ましいことだ、というべきなのでしょうか。3年後に生じ得るこのような状況を心配し、私は今、NHKは重大な危機、未曾有の危機に立ち臨んでいる、と思うわけです。そして、3年後、国民の名において、まるごとNHKをおかしな勢力に奪い去られないようにするために、市民として今なにをすべきか考え、できることはなんでもやっていく必要がある、と思うしだいです。

世界の歴史状況は、オバマ米大統領の出現

が象徴するように、究極の核廃絶を目指すうえで核被爆国・非核3原則をもつ日本が、他国にはできない積極的役割を果たすことができる意味を浮かび上がらせるとか、そうした方向の先で東アジアの非核化・地域安全保障が実現する可能性があること、なども考えさせ、私たちが本当に大きな転換期に入っていることを示唆しています。日本にもいろいろ新しい針路を模索するオプションが提供されているわけです。私たちは、このような変化に対応し、NHKが変わるべきはどのような方向に向かったのかと、つねに問いかけ、NHKが進む道を過たず、私たちの半歩先ぐらいを歩き、市民を適切に望ましい21世紀の世界に案内する役割を果たすよう、求めていく必要があります。「プロジェクト」JAPANの本当の成功は、NHK自身がそのような自覚をみずからしっかりもってことに当たらないと、達成は不可能でしょう。

NHKは、「プロジェクト」JAPAN内のほかの番組、たとえば先の「アジアの“一等国”」（台湾問題）では、植民地問題をきちんと取り上げましたが、番組によってはそのようにある方向に意識的に傾きをつけておいて、それとバランスをとるかたちで、『坂の上の雲』では、当時のナショナリズムを前面に出すなどの芸当をみせてくのではないかと、今からいささか憂鬱な気分です。このようなNHK流の中立公正の装いは、ときに遅効性の劇毒を、気付かれないようにまき散らすやり方となるからです。このような状況の出現をめぐつては、何度も、おかしな勢力とのつばぜり合いをすることも、覚悟する必要がありますが、私たちは鳩のごとく優しく、蛇のごとく賢く、一致結束して相手を凌いでいきたいものと、思います。

